

2015年6月28日

博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学
研究科名	スポーツ科学研究科
申請者氏名	楊 長明
学位の種類	博士（スポーツ科学）
論文題目	中国朝鮮族シルムのエスノグラフィー Ethnography of Chinese Korean Ssireum
論文審査員	主査 早稲田大学教授 寒川 恒夫 学術博士（筑波大学） 副査 早稲田大学教授 志々田 文明 博士（人間科学）（早稲田大学） 副査 早稲田大学教授 友添 秀則 博士（人間科学）（早稲田大学）

中国（中華人民共和国）には、今日、約 200 万人の朝鮮族が住んでいる。

朝鮮族は朝鮮半島にあっては国家を有する大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の中心民族（マジョリティー）であるが、その一部は過去において、すなわち 16 世紀より中国東北部に移住を続けてきた歴史をもつ。現在中国に住む朝鮮族はそうした移住者の末裔であり、中国建国（1949 年）後は政府によって中国 55 少数民族（マイノリティー）の 1 つに認定されている。そして、その大半が、中国で唯一の朝鮮族自治州である吉林省延辺朝鮮族自治州に住んでいる。

そうした朝鮮族を代表する伝統的なスポーツがシルム（朝鮮相撲）である。朝鮮族シルムを他民族の相撲から区別する目立った特徴は、その独特な帯と組み方にある。二人の選手は、150 センチほどの布帯の両端を結んで輪を作り、その輪を右脚に通し、右膝立ちにしゃがみ、互いに左腕を相手の輪に差し入れ、右手は相手の背中や腰に当て、準備ができると立ち上がり、始めの合図で輪を起点に投げ合うのである。

端午節や秋夕節など朝鮮族の重要な民俗祭に年中行事として永らく実践され、伝承されてきたこのシルムは、朝鮮族の民族文化を体現している。しかし、朝鮮族シルムは中国建国後に大きい変化に曝される。

本研究は、中国朝鮮族シルムが経験した変容を、中国人口の 95% を占める中心民族である漢族が展開する中華文化に対する少数民族朝鮮族の対応文化変容とみて、その過程を歴史学と文化人類学を総合して再構成しようとしている。そして、その中心的な考察対象時期が、吉林省延辺朝鮮族自治州がシルムを含む伝統文化を観光資源と認め、文化観光産業を本格的に展開する 2000 年以降に求めている。

論文の全体は、序章と結章を含め 6 章から成る。

序章では、論文の目的と研究方法論が述べられ、先行研究が検討されて本論文のオリジナリティーが示される。

先行研究では、①シルムに関する人文社会科学的研究は韓国シルムを論じるものが大半であって中国朝鮮族シルムについては限定的であること、②中国朝鮮族シルムについての研究も 2000 年までのものであり、またシルムのルールと技術の近代化研究が主であること、③すなわち、本論文がめざす対応変容分析は未着手であることが確認される。ここに本論文の高い独創性が認められる。

第 1 章「中国の相撲概観」では、中国におこなわれる（また、おこなわれた）相撲が史料と民族誌によって再構成され、比較によって、シルムの特徴が抽出される。

第 2 章「中国朝鮮族の歴史と文化」では、①朝鮮半島からの移住が史的に確認される 16 世紀から中国建国までの移住史が概観され、これを受け、国内における朝鮮族の帰属問題が行政次元でどのように論じられたかが明かされ、②中国建国後の中心民族である漢族が展開する中華文化の浸透によって朝鮮族の伝統文化がどのような影響を被ったかが、葬礼、食、服飾、建築、婚礼、祭礼遊戯について検討される。1980 年代後半に急速に進行したシルムの伝承危機を導いた伝統的文化基盤の変質を確認するためである。

第 3 章「中国朝鮮族シルムの歴史と現在」では、中国朝鮮族シルムの実施が史的に確認される 1920 年代以降のルールと技術の変遷が一部先行研究に抛りつつ、また中国建国後の少数民族伝統体育運動会等におけるルールと技術の変遷が論文作成者のフィールドワークによって再構成され、中国朝鮮族のシルムが、彼らの伝統的様式であるパ・シルムから韓国でおこなわれ、またシルムの国際様式となっている左シルムへと変更した経緯が分析される。この変更が、一方で、中央政府が民族政策として展開する少数民族伝統体育運動会の競技種目化動機、他方で、朝鮮族の国際化動機に発するとの分析は鋭い。また、シルム表示を漢族表記である「朝鮮族摔跤（シュワイジャオ）」から民族表記である「希日木（シルム）」へ改称を要求する行動を民族アイデンティティの表出と解する点も評価される。

第 4 章「中国朝鮮族シルムの観光化と国際化」は、本論文の中心を占める部分である。シルムの伝承危機に対応して取られた観光化変容（シルムの観光資源化、シルムの無形文化遺産化）、スポーツ化変容、国際化の問題が論じられる。

こうした変容は、伝統文化が否定された文化大革命を終息させ、市場経済原理を導入して中国の立て直しを図った鄧小平の改革開放政策の流れに掉さすもので、政府が 2000 年に発表した文化産業政策（開発が遅れた地域に持続可能な産業として観光を奨励する政策）に対応したものと論文作成者は位置付ける。

シルム消滅状況の立て直しに中心的に貢献したのが、2000 年に延辺朝鮮族自治州延吉市に設立された延辺星州青少年体育クラブであり、シルムの適応変容は、このクラブを基点に進行したとする。

クラブは延辺州体育局と連携してその下部組織の地位を得、そのことによってクラブ員はシルム専門家として延辺州や吉林省の代表選手として国内外の試合に出場することが可能になり、クラブは、さまざまな機会におこなわれるシルム大会に不可欠な人材を供給する組

織に成長する。

クラブのこうした状況が、シルムの観光化を現実のものにするのに大きく与かる。2000年代は国家が文化産業を強く推し進めた時期で、特に少数民族地区には地元の伝統文化によって持続が可能な産業として、民族文化を資源とする観光を推奨する。また、民族文化観光を支援するため、無形文化遺産の制度（国家レベルと省レベル）を導入し、少数民族の観光資源を法的・経済的に担保した。これを受け、吉林省や延辺州でも民族文化観光が計画され（朝鮮族文化テーマパークである「中国朝鮮族民俗風情園」の建設はその代表）、観光資源の発掘がおこなわれ、シルムも無形文化遺産の認定を受ける。

シルムは、延辺星州青少年体育クラブと民族観光とを触媒にして、かつて農民が素朴に年中行事的に楽しんだ次元を越え出る。この現象がシルムの観光化、またスポーツ化と概念化される。

他方、同じ朝鮮族国家である韓国にあってシルムはプロ・リーグを生むまでに発達し、2008年には韓国主導の世界シルム連盟が結成されるに至る。中国は2011年に世界シルム連盟に加盟し、これをもって中国シルムの国際化が始まる。

中国朝鮮族は、シルムの観光化とスポーツ化、それに国際化という変容を体験した。こうした変容は、元来の担い手である朝鮮族からすれば、シルムという一つの民族文化を消滅から救った適応戦略と言えよう。しかし、漢族が担う中国政府からすれば、一連のシルム変容は、少数民族対策という政治的意味を持つ。シルム変容は、少数民族朝鮮族と中心民族漢族の思惑が交差する境界上に現れた現象といえようとの指摘は鋭い。

結章では、それまでの論述が問題設定に沿って簡潔にまとめられる。

論文作成者による本論文と関わる学術論文は以下のものである。

Yang, C., Sougawa, T., Yuan, L., 2014, An analysis of Chinese ethnic Korean and South Korean Ssireum rules, Asia Pacific Journal of Sport and Social Science, vol.3, issue 2:159-171.

本論文は、問題設定の独自性と論述の実証性、結論の妥当性をもって、博士（スポーツ科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上